関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

早期カレッジ・ハイスクールの興隆 : 高卒時の準学士号取得で学習意欲を高める

著者	松村 暢隆
雑誌名	關西大學文學論集
巻	55
号	3
ページ	101-117
発行年	2005-12-20
その他のタイトル	The Rise of Early College High Schools : Motivating High School Graduates with the A.A. Degree
URL	http://hdl.handle.net/10112/12541

早期カレッジ・ハイスクールの興隆
――高卒時の準学士号取得で学習意欲を高める――

松　村　暢　隆

はじめに

アメリカの学校での才能教育（gifted and talented education）は，概念的に特殊（special）教育の一環として特別プログラム等が組まれ，盛んに実施されてきた（松村，2003）。しかし最近は，州や学校区の予算削減，規模縮小，州の標準学力テスト重視などのために，単独で実施することが困難になっている。そこで才能教育を唱導・実践する者は，社会に広く受け入れられる実践との融合を方略として，生き残りを図るようになった。

ひとつの方向は，障害と才能という「二重の特殊性」（twice-exceptionality）を強調することによって，障害児の特殊教育との統合を図ることである（松村，2004）。すなわち，一人の子供に身体・知的障害や軽度発達障害（学習障害，ADHD，高機能自閉症等）と才能が併せて存在することを認識して，彼らの特殊な学習ニーズや精神的（社会的，情緒的）ニーズを適切に処遇するべきことを訴えるのである。

もうひとつは，低所得層やマイノリティ，移民など社会・経済的に不利な家庭の子供たちにも，能力・適性に応じた学校教育の機会を公正に提供するための多様な方法に，才能教育で蓄積された知見が生かされるべきだという主張である。その一環として，社会・経済的に不利であるが高学力の子供たちが，学習を魅力的に感じて継続できるような，無償の学校を作り運営するという動きがある。本稿では，後者について述べてその意義を考える。

1．早期カレッジ・ハイスクールとは何か

学校での才能教育として，種々の領域で才能のある子供の能力や興味，学習スタイルに応じた個性化プログラムが実施される。学年相当より進んだ内容を学習して，科目の修得単位として認定される措置を「早修」(acceleration) と呼ぶ［これに対して，広く深く学習しても上位学年の単位認定がされない場合を「拡充」(enrichment) と呼ぶ］。早修には，飛び級，早期入学，科目ごとの部分早修，ＡＰ（大学科目早期履修）といった種々の形態がある。

その中で，「早期カレッジ・ハイスクール」(early college high school，以下ECHS) は，2001年に初めて開設されてから，最近アメリカ全土に数十校と急速に増えてきている。

ECHSは，公立のハイスクール（９～12学年，以下ＨＳ）であるが，二年制大学の「準学士」(A.A.：Associate in Arts) の学位 (degree) を卒業時に得られる。前半の９，10学年で，ＨＳのカリキュラムを短縮して修了してしまう〔卒業時にすべてを修了する場合もある〕。その時点で，学校としてＨＳ卒業にはならないが，認定機関の試験を受験してＨＳ卒業資格を取得できる。そして後半11，12学年で，コミュニティ・カレッジ (community college，公立の二年制大学，以下ＣＣ) のカリキュラムで単位を修得する。

すなわち，12学年修了時に「二重の卒業資格」(dual degree) を得ることができる。従来からも早修として，ＨＳに生徒が在籍しながら個人ごとに大学の単位を取り溜めする「二重在籍」(dual enrollment) の措置が行われることがあり，ＨＳ卒業時に四年制大学の３年次に編入学も可能であった。ECHSでは，そのための取り組みが学校ぐるみで実施される。在校中にＨＳより高度な技能を習得して，ＣＣ卒業の資格で就職できるのである〔中流の給料の職業に就くには必須だと認識されている〕。

本来の主要な目的は，マイノリティや移民，低所得層の生徒のＨＳやＣＣ，および編入学した四年制大学の退学を減らし卒業率を上げることである。アメリカのＨＳでの学習は，高学力の生徒にとって卒業するだけならやさしいが，

むしろ退屈でドロップアウトしてしまうこともある。そこで，学力がかなり高いが学校に興味を失って退学したり落ちこぼれる生徒に，高等教育に向けて学習への動機づけを高めようとする。生徒の規模が400人以下の「小さな学校」で，４年間のプログラムを組んで，学習のくり返しなど無駄を省いて高度な学習を取り入れ，学習を有意義にして，生徒の意欲を高めようとするのである。

つまりドロップアウト対策の一つであり，かならずしも才能児を焦点としたプログラムではない。しかしその中で，とくに不利な家庭環境にある高学力の生徒が救済されるので，一種の才能教育の役割を果たしている。

２．モデル校のプロトモデル

次節に述べる最初のECHSが学校構造やカリキュラムのモデルとしたのは，その企画・運営に協力した私立大学に併設の特別な学校であった。

これは，四年制大学を11学年から開始，つまり２年飛び級する形態の学校で，「早期カレッジ」（early college）と呼ばれる。四年制のリベラルアーツ・カレッジ（教養専門の大学）として認可を受けているが，学生は11学年（一部12学年）で入学する。ＨＳ卒業の資格は得られず，大学の学位がそれに取って代わる。つまり２年間で（早ければ12学年修了時に）準学士の学位を取得して，４年間で四年制大学の学士（B.A.：Bachelor of Arts）の学位を取得することができる。

今まで存在するのは１校だけで，「サイモンズ・ロック・カレッジ」(Simon's Rock College of Bard，マサチューセッツ州グレート・バリントン［Great Barrington］所在）である。この学校は1966年にホール（Hall, E. B.）によって創設され，1979年にコロンビア大学の学部教養教育を担当する「バード・カレッジ」(Bard College：ニューヨーク州アナデイル・オン・ハドソン［Annandale-on-Hudson］所在）に合併された（Simon's Rock College, 2005)。

ふつうのＨＳで学業優秀で意欲の高い生徒は，最後の２年間はやりがいを損なわれている，あるいはSAT（大学入試用の標準学力テスト）等の大学受験準備で時間と労力を浪費している。そこでその代わりに大学の教養課程の授業

を履修して学習のやりがいを高める。16歳で大学の学習を始めても問題なく，学業と社会生活のニーズを満たすのだ，という理念がある。

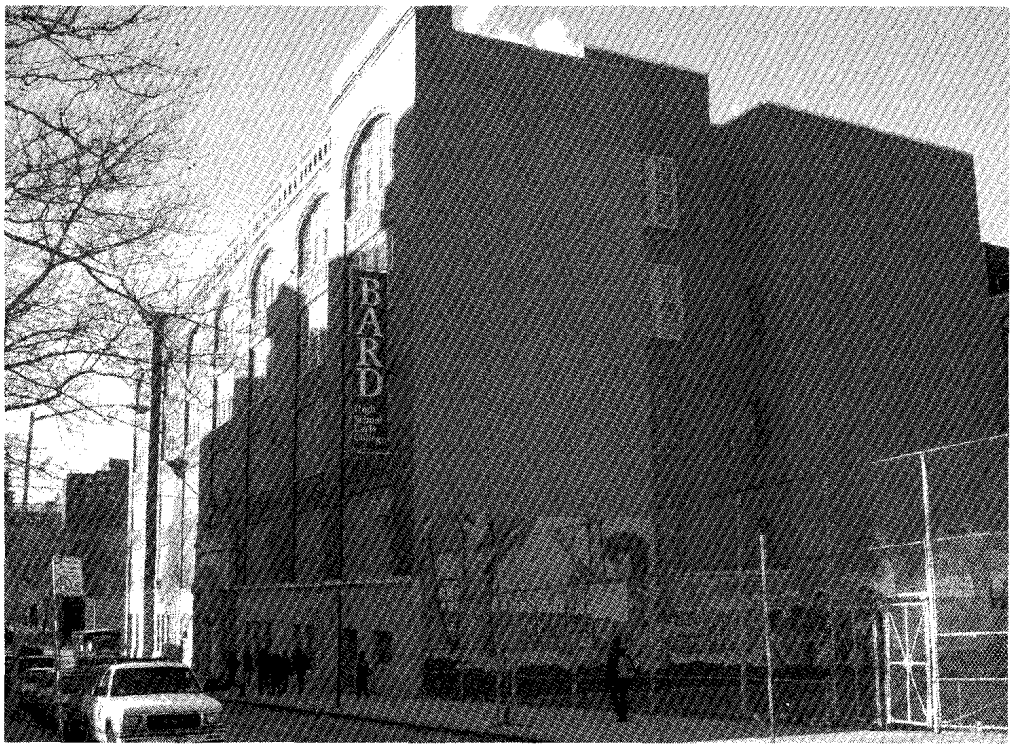
学生の選抜は，一般入試では，志願者について独自の筆記試験は行わず，標準テストや学校の成績による学力と，学生生活に適応できる自立性，学校が志望動機・ニーズに適合するかといった要因を考慮して，専門委員が総合的に判断する。また奨学生入試は「卓越への早修プログラム」(Acceleration to Excellence Program) と呼ばれ，学校の成績（評定平均値3.5以上）や標準学力テストの成績，課外活動，小論文，推薦状，面接等で総合判断される。毎年20人の奨学生は，11，12学年で授業料（6万ドル以上）を免除される。他の約30名には，毎年5千ドルから1万ドルが給付される。後半2年間は，優秀な学生は種々の全国的な奨学金を得ることができる。

カリキュラム自体はふつうの大学教養カリキュラムと目立ったちがいはないが，最初はとくに作文や思考スキルの訓練を重視する。学生全体で450人以下と少人数で，少人数クラス（10名前後）で授業を行う。

キャンパスや学生生活はボーディングＨＳ（私立の寄宿制）やカレッジに似ている。森林地帯の広大なキャンパスに，１年次生は寄宿して，上位年次生は通学も選択できる。

12学年で準学士の学位を取得して，そのまま残らずに他大学の３年次に（２年早く）編入学する者もいる。そしてそこを卒業した学生はけっきょく大学院に２年早く進学できることもある。

早期カレッジは，大学早期入学の特殊な一種であり，中等教育の代替となる早修の注目すべき形態ではある。しかし，サイモンズ・ロックでは学費が年間３万ドル以上かかるので（種々の学内外奨学金も得られるが），奨学生入試の学生を除けば，経済的に富裕な階層の子弟のためのエリート教育といわざるをえない〔実際，個性化のための多様で高度な教育環境を一つの学校内で理想的に整えるには，学校側も費用がかかるであろう〕。



BHSECの建物外観（筆者撮影，2004年１月）

３．最初のモデル校

早期カレッジの理念，つまり12学年修了時に準学士の学位を得られる措置が，社会・経済的に幅広い層に，むしろ不利な層に適用されることが望ましい。そこで2001年９月に，バード・カレッジとニューヨーク市教育局との協同で，「バード・ハイスクール早期カレッジ」（Bard High School Early College：BHSEC）がニューヨーク市内に創設された（Bard High School Early College, 2005）。

筆者は2004年１月に同校を訪問した。マンハッタン南東（E. Houston St.）にある閉鎖された小学校の校舎を改装して利用している〔2002年夏にブルックリンの仮校舎から移転した〕。広大なキャンパスのサイモンズ・ロックとはちがって，建物は手狭で古く，学習環境としては難もあるが，校舎内はきれいに整頓され，維持費を抑えるにはむしろ効率的だろう。理事長（Dean）のカプラン女史（Marjorie Kaplan）は，経営のためアメニティ（建物，設備）を切りつめるのだと説明していた。

1．体制

四年制の公（市）立学校（授業料無料）で，普通のＨＳの代替となる。生徒は９学年に入学し，２年間でＨＳの課程を修了し，ニューヨーク州のＨＳ卒業資格試験（Regents Exams）にすべて合格すれば卒業資格（diploma）を得られる。その後11学年から２年間で二年制大学の課程を修了して，バード・カレッジから人文科学の準学士の学位を取得できる。卒業時に準学士号を取れればＨＳ卒業資格は不要にも思えるが，親たちの要請も強く，公立ＨＳとしての存在意義を保つ政治的配慮からだという。

教師は，ニューヨークの公立，私立の学校から移った者や，新しい試みに惹かれたカレッジの教員など30数名で，全員州の有資格者で，２／３は博士（Ph. D.）の学位をもっている。教員給与はバード・カレッジが補助している。

2．入試

入学者の選考は，ニューヨーク市５つの行政区（borough）内の生徒対象に，それまでの学業成績（評定平均値Ｂ＋［86点］以上）と教師の推薦，作文・数学の試験に加えて，面接で選抜する。生徒は意欲と知的好奇心を示していることが重要だという。2003年度までは学校独自の選考だったが，04年度から，ニューヨーク市の公立ＨＳ一括応募に制度が変わった〔志望優先順位を付けて12校まで応募できる〕。

１学年の上限人数は125名である。初年度（2001年）は応募者数千人中260人（９，11学年半数ずつ）が入学して１年後に246人が残った（黒人35％，白人30％，ヒスパニック15％，アジア12％）［2001，02年度は，４つの学年を完成するために11学年も直接募集した］。2005年の９学年には，応募者約４千人で135人が入学した。

筆者が訪問した2004年１月時点では，女子が７割と多かった。運動クラブがないのが男子に不人気な理由のひとつだという。また初年度は白人が３割というが，訪問時には白人が半数よりかなり多かった。学力による入試のせいで，母集団の人種・民族による人口比が反映されないのだろう。

3．カリキュラム

サイモンズ・ロックに倣って，１クラス20人以下である〔市の学級規模はふつう34人〕。４年間を通じて，書くことや討論，協同，探究が奨励され，学年度初めの１週間には，クリティカル・シンキングの講習でそういう学習のオリエンテーションを行う。セミナーでは討論と作文，分析等による思考スキルを訓練する。１学年６クラスで，授業クラスはホームルーム固定ではない。ホームルーム活動としては，週１回，学級担任（academic advisor）が付いて集会を行う。

９，10学年は，カレッジへの移行を円滑にするためのカリキュラムが組まれる。評点平均値2.0点（Ｃ）以上取る必要がある。11学年（カレッジ１年次）から２年間は，「早期カレッジ・プログラム」として一般教育のコア・カリキュラムを履修する。カレッジの60単位を修得する。

年間スケジュールは，ニューヨーク市立ＨＳ共通のものに従う。授業は午前８時55分から午後３時40分までで，55分授業が６時間ある。必修科目は週４回開かれる。芸術科目や体育，選択科目はそれより少ない。後半２年では個人学習のために時間割があまりきつく固定されていない。

開講される科目は以下の通り（Bard High School Early College, 2003）。

①ハイスクール・プログラム（９学年：Grade ９，10学年：Grade 10）

・**数学**：代数Ｉ，幾何，三角法，微積分入門，統計学。

・**理科**：生物・化学の総合学習。実験が多い。SAT IIの受験準備ができる。

・**歴史と文学**：総合的なテーマ学習で，世界の歴史・地理と文学の理解を深める。

・**外国語**：最初の学期に，中国語，ラテン語，スペイン語入門。その後どれかを選択。

・**芸術**：美術，音楽（交響楽団），演劇，文芸創作のどれかを学期ごとに選択。

・**保健・体育**

②早期カレッジ・プログラム（11学年：Year 1，12学年：Year 2）

・**１年次生（freshman）セミナー**：学際的な人文学のセミナーで，秋学期に

は古代・中世のソフォクレス，プラトン，ダンテについて論文を書く。春学期では，近世のシェークスピア，ルソー，ロック等について論文を書く。

・**2年次生（sophomore）セミナー**：春学期では，近代のマルクス，ダーウィン，フロイト等について，秋学期には，20世紀の思想について研究プロジェクトを行う。

・**科学**：物理学（微積分を含む），一般化学，地学，生物学（細胞，分子等）。多種のセミナーや独立研究がある。1年分以上が必修。

・**数学**：微積分Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ，離散数学，有限数学，応用統計学。1年分以上が必修。

・**外国語**：中国語，ラテン語，スペイン語のいずれかで，1年次は中級コース，2年次は上級コースを履修する。1年分以上同じ言語が必修。

・**選択科目**：アフリカの歴史・文学，美術史，描画，ニューヨーク音楽，コンピュータ科学，神経科学，ルネッサンス史，現実の経済，法律入門，20世紀ラテンアメリカ文学，メディア研究，哲学，教育学理論，心理学入門など。

成績評価は一般のGPA（評点平均値）と同等に付けるが，芸術や体育は得点は付けない。また，クラス内で成績順位は記録しない。競争的よりも協同的な雰囲気を作り，生徒が互いに尊敬し合えるためだという。

準学士号を得るためには，カレッジで60単位以上修得して，累積GPA2.0以上が必要である。

4．生活

寄宿制ではなく，生徒は市の全区から公共交通機関で通学する。午前7時に門が開き，講堂や食堂で学習できる。8時から朝食はだれでも無料で食べられる〔実際は100人ほどが利用〕。

放課後のクラブは1／4の生徒が参加している。他は地域奉仕（小学生チューター，老人対象）など校外で行う。人気クラブは，「カフェ」（cafe）という自分たちが行う演芸（talent show）で，地域の小学生を招いたりして講堂で演技する。スポーツは設備の制約で校内でできないが，バスケット，陸上（競

走）などが人気である。ただし設備の点でＨＳのリーグに認められるのはテニスだけである。

社会・情緒的問題は，暴力，いじめなど目立つ問題は起こらない。お互いを尊重することを強調しているからだという。たしかにニューヨーク市のＨＳにしては異例のことなのだろう。それでも2002年度で約20名（約２割）がドロップアウトした。ただし学業的問題によるのであって，ニューヨーク市ＨＳ全体の約５割と比較すればドロップアウト率は低い。

５．進学

12学年修了時に準学士号を取得すれば，全国のたいていの四年制大学の３年次に編入学できる〔たいていの大学の一般教育課程修了の要件を満たす単位を修得している〕。GPA3.0点以上で卒業した学生は，サイモンズ・ロック・カレッジの学士コース（３年次）にも進める。もっとも希望によってはどの大学の１，２年次に進んでもよい。

2003年６月の最初の卒業生は，９割以上（93名中80数名）が，州内の公（市・州）立，私立をはじめ全国の大学に進学して，その約１／４（20数名）は１年次に入学，残り（50数名）は２，３年次へ編入学した。

４．ECHSの拡大

１．ゲイツ財団の計画

BHSECの創設にも助成（３年間）して，2002年から全国にECHS次々と開設するプロジェクトの推進力となったのが，「ビル＆メリンダ・ゲイツ財団」(Bill & Melinda Gates Foundation）である。同財団は，BHSEC（および後述のMCHS）をモデルにして，2002年３月当初の発表では，４千万ドル以上を拠出して2007年までに70校のECHSを開設するという計画を立てた。その後，計画規模は拡大して，2005年９月時点の計画では，2011年までに166校を開設または改組して，2012年までに62,000人の生徒を対象とするする予定となった(Early College High School Initiative, 2005)。

2005年9月時点で，約1億2千万ドルの助成金によって67校が開設され，12,200人の生徒が在籍している。学校は24州で開設され，ニューヨーク市，カリフォルニア州，ワシントン州，オハイオ州などが多い。

上述のように，マイノリティや移民，低所得層の生徒のドロップアウト対策が主眼であり，都市部の低所得層のマイノリティの学力や卒業率向上に寄与することが優先課題である。いくつかの団体が黒人，ヒスパニック，アメリカ・インディアンなど不利な集団のための学校を，既存のＨＳを改編したり，ＣＣ併設校やチャータースクールを創立したりして，開校することを計画してきた［ゲイツ財団（基本財産288億ドル！）からの約12億ドルの助成によって，これまでECHSの他にマイノリティ・低所得層対象の上質な小さな（生徒数400人以下）ＨＳが約2千校設立された（Bill & Melinda Gates Foundation, 2005)］。

ただしゲイツ財団は，学校を開設する団体（NPO等）へ企画・開設資金を出すだけなので，個々の学校の運営，存続はその後の資金しだいになる〔後は多様な公的，私的資金を集める〕。

2．ECHS協会

ECHSへの資金援助の運営は，「ECHS協会」（ECHS Initiative）が実行している（Early College High School Initiative, 2005)。この協会はスポンサーのゲイツ財団から資金を受けて，カーネギー財団，フォード財団，ケロッグ財団も協賛（support）している。協会の仕事全般の取りまとめは，「未来のための仕事」（Jobs for the Future：JFF）という団体が統括事務局（overall/leader coordinator）として行っている。

協会は，５年間に６校以上新設または改組（redesign）する団体（全国・州規模の教育改革団体，大規模学校区，特別な人口集団を援助する団体）に助成金を出す。企画・開設資金だけであって，運営資金は出さない。各学校はその後は，他の助成金や寄付金を得ることもあるが，他の公立ＨＳと同等に運営される。

協会が助成して協会に加盟している，学校開設または賛助の団体は，2004年

12月時点で12団体で，上記JFFを始め，後述のMCNCやCUNY，カリフォルニアＣＣ協会などが含まれる。

3．ECHSの形態

ECHS協会から資金を提供された団体が設立するECHSは，中等―高等教育連携の形態としては多様である。BCHSのように独立した建物の公立ＨＳが校内で充足できるＣＣのカリキュラムを提供するだけではなく，多くは大学（ＣＣや四年制）が母体となってＨＳを創り，附属施設として大学キャンパス内（約５割）や付近（約３割）に，あるいは総合制ＨＳ内（約１割）に設置されている。生徒は大学が開放する科目をキャンパスで履修して単位修得する。

ＨＳと大学の連携として，公（市）立ＨＳ（約２／３）やチャータースクール（約３割）とＣＣとの連携パターンが多い。あるいは，それらＨＳと州立大学との連携，さらに私立大学（教養学部）のキャンパス内のマグネットスクール（公立）というパターンもある。

4．ECHSの特徴

ECHS協会に属する学校には，成果が上がる（high-performing）学校として，次のような共通の特徴がある。

①研究に基づく主要な目標と，知的な使命を，共通に重視する。

②明確な高い期待と基準を共有して，すべての生徒が一貫した厳密な学習課程を修了する。

③小さな，個性化された学習環境で，生徒数は400人以下である。また生徒の出身小学校やミドルスクールと連携することもある。

④生徒間や教師間，生徒と教師間で互いを尊重して責任をもつ。

⑤教師・職員が協同して，親と地域を教育のパートナーに含める機会をもつ。

⑥学習成果を重視して，目に見える能力に基づいて生徒を進級させる。

⑦テクノロジーを手段に用いて，魅力のある想像性に富むカリキュラムを計画，提供する。

また，教育実践の特徴として，つぎのような点があげられる。

①**共通のビジョン**：生徒と教師，親，大学など学校関係者すべてが，学習に価値をおくような共通のビジョンをもつ。生徒が大学の学習を始めるのに必要な期待水準を明確にする。ＨＳと大学は役割と責任について合意しておく。

②**学習と支援という文化**：カリキュラムと学習指導によって生徒は言語学習が促進され，能動的に探究できる。高度な学習を深め，知識を応用する機会と時間がある。教師は専門的で，大学の教員が協同する。教職員には絶えず研修の機会がある。大学課程では，大学で行われるような種々の優れた教育方法を用いて，大学の施設を利用できるようにする。

③**結果の重視**：教職員は，生徒の学習の進歩のようすを定期的に評価して検討する。生徒は各自の学習計画を立てて，自分の学習に責任をもち，自己評価する。生徒は学習の進歩を，テストや作品など多様な成果の指標で示す。学校には，ＨＳと大学課程の修了を認めるための明確な基準がある。大学課程の水準は，一般に認められるものでなければならない。

現在は新設校が増えつつある状態で，まだ学校での実践の検証，評価が十分に進んでいないので，これらの特長は，経験的に実証されたものというより理念に近い。しかし，そういう実践を推進できる企画が補助金の対象に選ばれているので，共通の特徴としてかなりもっともなものであると推測できる。

5．ミドルカレッジ・ハイスクール

ECHSの制度開始後それに加わるようになったが，カレッジと二重在籍できるＨＳとしてそれ以前から存在していた学校に，「ミドルカレッジ・ハイスクール」(middle college high school，以下MCHS）がある（Wechsler, 2001)。ＣＣのキャンパス内に併設され，生徒はＣＣの施設と開講科目を利用しながら，ＨＳとＣＣの両方の卒業資格に必要な科目を履修，単位修得する。とくに十分に処遇されない(underserved)，もっと端的に言えば危機的な状況の(at-risk)低所得層やマイノリティの生徒・学生の学習・卒業を支援するという理念が，ECHSと共通している。

ただしECHSのように，９学年から４年間在学して（12学年修了時にＣＣ２年分の単位をすべて修得の上）準学士号を取得することが厳しく要求されているのではない。標準は５年間在学して13学年で準学士号取得を目標とするが，生徒は一度ＨＳをドロップアウトして数年以上経って戻ってきたり，留年しながらでも，ＣＣの単位を取り溜めして高等教育を継続して受ける意欲を持続できる。

全国に増えてきたMCHSが31校（2004年時）参加して，「ミドルカレッジ全米協会」(Middle College National Consortium: MCNC)を構成している(Middle College National Consortium, 2005)。この協会は1993年に創設され，「ニューヨーク市立大学」（CUNY：City University of New York）の一つである「ラガーディア（LaGuardia）ＣＣ」に本部が置かれている。

最初のMCHSは，ラガーディアＣＣ内の「MCHS」であった（Wechsler, 2001)。このＨＳは，ラガーディアＣＣとニューヨーク市教育委員会が協賛して，カーネギー財団等の助成を受け，1974年にロングアイランドの同ＣＣキャンパス内に開設された（９～13学年)。キャンパス施設の利用や二重在籍によって学習を魅力的にして，中退を減らすことをめざしてきた〔生徒の半数以上が低所得層およびヒスパニック系で，通常のＨＳだと卒業できない危機的な状況の生徒である〕。開設後間もない70年代に，ニューヨーク市内のＨＳのドロップアウト率が約５割だったのに対して，ラガーディアMCHSのそれは十数％であった。

ラガーディアMCHSは，1988年には法的な要請で四年制（９～12学年）となり，99年にチャータースクールとなって「ラガーディアＣＣ・ミドルカレッジ・チャーターＨＳ」(Middle College Charter High School at LaGuardia Community College）と改称された。2002年からECHS協会の助成を受け，ラガーディアMCHSは，ECHSに組み入れられた（Middle College Charter High School, 2005)。

ラガーディアMCHSに続いて，ニューヨーク市内にMCHSが４校，1985年から87年にかけて開設された。「国際(International）ＨＳ」(ラガーディアＣＣ，

2002年からECHS),「リンカーン科学アカデミー」(Lincoln Academy of Science, ホストス［Hostos］ＣＣ）等である。

それらの成功例をモデルとして，引き続き他の州でもいくつか，学校区とＣＣの協同で，MCHSが開設され始めた。カリフォルニア州では，1988年に2校開設されたのを始めとして，2005年で13校開設され，２千人の生徒が在籍している（California Community Colleges Chancellor's Office, 2005)。

MCNCに加盟するMCHSの一部は条件を整備してECHSとして助成されているが，ECHSではなく５年以上在学できる緩やかな学年制で残るMCHSも多い。MCNCは2002年からECHS協会の助成を受け，MCHS12校の改組を含めて，全国にECHSを30校開設予定である。

５．ECHSの意義と日本の才能教育への示唆

ECHSは，公立で授業料が無料で，居住地で通えるので，サイモンズ・ロックのような私立学校とはちがって，マイノリティや移民など社会・経済的に不利な階層の生徒に開かれている。それでもなお，選抜には作文能力や学校での優秀な成績，強い動機づけがすでに表れていることが重視されるので，社会・経済的に不利な集団で潜在能力をもつ者がじゅうぶん公平に選抜されるとはかぎらないであろう。

ECHSは，不利な社会集団の生徒を救済する「落ちこぼれ」対策が主眼で，2002年に成立した修正ESEA（初等中等教育法)，いわゆる「落ちこぼれを出さない教育法」(No Child Left Behind Act）の趣旨にかなっている。才能教育の一環として開始されたわけではないが，それでも公立のＨＳで，二年制大学を（編入学すれば四年制大学も）２年早く卒業できる早修措置として斬新である。「小さな学校」でやりがいのある学習ができれば，高学力の生徒にとって「時間の無駄」をなくす改革の一つの手法にもなるだろう。従来の才能教育の措置では認定されなかった，不利な環境の才能児も救済されるであろう［子供たちに早期から競争させて学力トップの小集団を早期選抜して，エリート教育を実施するために科学ＨＳなどを設立するという，シンガポールや中国，韓国など

最近の東南アジア諸国が採るトップエリート選抜・育成を主眼とした国策とは理念がまったく異なる〕。

また，ＣＣがキャンパス内に設立・運営するECHSは，ＨＳと大学の連携として革新的である。ＨＳ独立採算では運営が苦しくても，大学の資金に余裕があれば援助を得られて，安定した教育活動ができる，という利点がある。ただしECHSの効果と弊害はまだ実証されていないので，今後データの蓄積による検証が必要である。

日本でも今後，高大連携の新たな形を考える際に，ECHSの措置のうち応用できる点は参考になる。たとえばつぎのような新たな制度で，高校で大学（相当）の科目を履修する「二重在籍」の措置は実現可能ではないか。

①中高一貫校で，高２で高３までの必要単位を修得する。併行して高３までに大学１，２年次配当科目の単位を修得する。

②それを受けて大学の措置として，大学３年次編入学に，18歳を特例として認める。併せて，高校で修得した大学１，２年次配当科目の単位を既修認定する。

とくに大学の附属中等学校で，高大連携を密接に行う。高３で，短大卒相当の単位取り溜めまで及ばないで，一部の大学科目単位修得なら，ＡＰ（Advanced Placement：大学科目履修）と同様の措置を取る（部分早修）。つまり大学１年次に入学するが，一部の科目の単位を既修認定してもらい（２年次に編入学とも解釈できる），大学を３年間で卒業する〔大学中退で大学院へ飛び入学という現行制度とは異なる〕。

現在でも既に①は部分的に可能で，昭和女子高等学校と昭和女子大学の連携で，高２までに高校のカリキュラムを修了して高３で大学の課程を履修する（五修生と呼ばれる）。その１年分を拡大して，２年分履修できるようにするのである。

②も，昭和女子大学へ進学した五修生は，大学を３年間で卒業することができる。大学院への進学も，飛び入学（大学中退）としてではなく，大卒で１年早く進める。大学科目の履修による単位を，現行のように高校の単位として認定するのではなく，大学入学後に，大学の単位として認定するのである。現行

制度で大学生は（例外措置以外は）18歳以上という制約があっても，2，3年次編入に各々19歳，20歳という制約はないので，大学ごとの判断で制度を作り出すことができる。

なお，高校卒業時（18歳）に「短期大学士」（2006年からの短大卒の学位）の資格を与える制度は，事実上の短大課程修了を資格として認めるという問題になる。しかし日本ではこれ自体はあまり利点とニーズがなさそうで，むしろ大学科目修得は四年制大学への進学が有利になることが第一の意義と捉えられるであろう。

このように，現行の「教育上の例外措置」（飛び入学）とはちがって，生徒・学生は高校3年の年限を短縮（中退）することなく高卒の資格を得た後に，大学を2，3年間で卒業して就職や院進学ができる。高校在学中も，学習がつまらなくて意欲をなくすことなく，大学で学習を継続することを志向して充実した挑戦ができる。この措置を，高学力の生徒・学生を受け入れる中高一貫校や中等学校と大学が連携して実施すれば，高学力の青年のための才能教育の一つの措置として，ごく少人数対象の「例外措置」ではなく広めることができる。

ただし，高校での早修の学習や大学の在学年限短縮が，個々の生徒の学習上のあるいは心理的なニーズに合ったものであるかどうか，在校中に検討しながら，学校内で普通の大学進学にコース変更できるような柔軟な体制も整える必要があるだろう。

文　献

Bard High School Early College (2003) *School profile 2003-2004.* Author.

Bard High School Early College (2005) Bard High School Early College. http://www.bard.edu/bhsec/ (2005/10/14).

Bill & Melinda Gates Foundation (2005) Bill & Melinda Gates Foundation. http://www.glf.org/ (2005/10/14).

California Community Colleges Chancellor's Office (2005) Middle college high school. http://www.cccco.edu/divisions/ss/mchs/mchs.htm (2005/10/14).

Early College High School Initiative (2005) The Early College High School Initiative. http://www.earlycolleges.org/ (2005/10/14).

松村暢隆（2003） アメリカの才能教育：多様な学習ニーズに応える特別支援．東信堂．

松村暢隆（2004） 才能児の特別支援教育．鈴木陽子他（編）特別支援教育への扉（pp.183-193）．八千代出版．

Middle College Charter High School (2005) Middle College Charter High School. http://www.lagcc.cuny.edu/mchs/ (2005/10/14).

Middle College National Consortium (2005) The Middle College National Consortium. http://www.laguardia.edu/mcnc/ (2005/10/14).

Simon's Rock College (2005) Simon's Rock College of Bard. http://www.simons-rock.edu/ (2005/10/14).

Wechsler, H. S. (2001) *Access to success in the urban high school: The middle college movement.* New York: Teachers College Press.

［筆者は，2003-2004年度フルブライト奨学金（Fulbright grant）を給付され，コネティカット大学・国立才能教育研究所（NRC/GT）にフルブライト研究員（2003年８月～2004年３月）として滞在した。日米教育委員会（JUSEC）並びにNRC/GT所長・レンズーリ（J. S. Renzulli）教授に謝意を表する。本稿は，関西大学在外研究員等規定（外国留学者）に基づく研究成果の一部である。本稿の一部は，アメリカ教育学会第16回大会（2004年11月）で発表された。］